調査報告

架橋離島と小規模離島のいま④

岡山県備前市の島々

本誌編集部

本稿では、令和五年九月八日に実施した岡山県備前市の日生諸島――離島振興対策実施地域の小規模離島の大多府島、鴻島および同地域指定が解除された架橋島の鹿久居島、頭島の現況調査の結果について報告する。

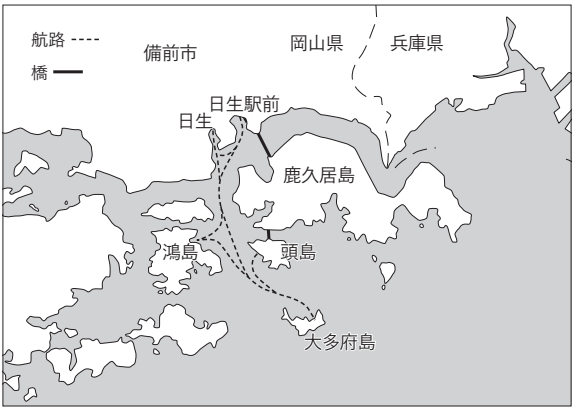
生活基盤の充実が課題

大生汽船の定期船が、本土の日生港から大多府島と鴻島をそれぞれ一日七便（二五分）、同五便（一五分）で結んでいる。

大多府島は、面積〇・四平方キロメートルの島で、令和二年の人口（以下、人口はすべて国勢調査）は四七人と、一〇年前（平成二二年）の八一人から四割以上減少している。高齢化率は六二パーセントで、備前市全体の三九パーセントと比較して高い。産業別就業者数は、一次産業一六人、二次産業〇人、三次産業二人（令和二年国調）と、ほとんどが一次産業従事者である。

島の港は元禄一一（一六九八）年に開かれた。島内には当時の防波堤である「元禄防波堤」や開港と同時に作られたという「六角大井戸跡」が残されている。井戸は、島に水道が開設されるまで、住民と耕地の命の水を賄ってきたとされる。また、灯台にあたる「大多府燈籠堂」も昭和六一年に再建されるなど、歴史好きの心をくすぐる島である。

鴻島の面積は二・〇七平方キロメートル。船窓から眺めると、島の山がちな斜面にへばりつくように無数の家屋が建てられ、一種独特の景観を成している。人口は、大多府島とは逆に四二



人（平成二二年）から五〇人（令和二年）と、この一〇年で増加しているが、高齢化率は六四パーセントと高い。産業別就業者数は、一次産業七人、二次産業四人、三次産業一二人と、三次産業が最多となっている。備前市の馬場敬士企画課長によると、人口が増加している理由は、定年退職した世代が島に移住してきているからだという。かつての別荘ブームの際に建てられた物件のうち、使用可能なものが市場で売買されており、検索サイトからすぐに不動産情報がヒットする。

上水道は、両島とともに海底送水管により給水されているが、耐用年数四〇年を経過しており更新が課題となっている。汚水処理については、大多府島では漁業集落排水施設（大多府浄化センター）で処理しているが、昭和五八年の供用開始から四〇年を経過している。鴻島は合併処理浄化槽による汚水処理区域であるが、一部に未設置世帯があり、し尿収集車による処理が行なわれている。ごみ処理については、二島とも本土と同様に収集処理している。

医療機関は、大多府に備前市立日生病院大多府診療所があるが、島内に医師は常駐しておらず、内科と整形外科の医師がそれぞれ週一回来島する。鴻島においては医療機関が島内になく、医師の来島もないため、本土に通院する必要がある。なお、瀬戸内海巡回診

大多府島の六角井戸。

別荘が建ち並ぶ鴻島。

日生架橋に関する年表

昭和六二年　頭島町内会全戸が架橋預金を始める

平成六年度～一八年度　第一期架橋事業として頭島大橋を建設（鹿久居島～頭島）

平成一八年度～二六年度　第二期架橋事業として備前♡日生大橋、梅灘橋を建設（本土～鹿久居島）

平成二九年　第二二次指定解除により鹿久居島、頭島が法対象離島から外れる

療船「済生丸（さいせいまる）」による特定健診やがん検診などが実施されている。介護福祉施設については、両島ともにない。

小中学生は、本土の学校へ定期船で通学しており、市による通学費の補助が行なわれている。商店も両島ともにないため、食料品などの移動販売が週一回の頻度で島に来るほかは、本土に出向かなくてはならない。ただ、通販などと組み合わせるとさほど不便でないのかもしれない。

観光業で栄える架橋島

日生諸島は、昭和三六年九月二五日の第九次指定で離島振興対策実施地域の指定離島となり、平成二九年四月一日の第二二次指定解除により鹿久居島と頭島の指定が解除された。この架橋事業は、昭和六二年から頭島町内会全戸が各世帯月額五〇〇円の架橋預金を始めるなど、地元の熱意ある運動の結果、平成六年度に国庫補助事業として採択されたものである。

本土と「備前♡日生大橋（七六五メートル）」で結ばれる鹿久居島は、面積一〇・一四平方キロメートルと岡山県内で最大の島である。人口は平成二二年、令和二年ともに一一人と横ばい。主要産業は、みかん狩りなどの観光農園や「古代体験の里 まほろば（縄文時代の集落を復元し、火おこしを含む各種体験や宿泊が可能な施設）」などを活用した観光業である。

今回の調査時期が九月初旬であったため、柑橘の実りを目にすることは叶わなかったが、観光農園の看板が道路沿いの随所に設置されており、季節になれば本土から車で観光客が押し寄せることが想起させられた。

頭島は、鹿久居島と「頭島大橋（三〇〇メートル）」で結ばれている。面積一〇・六〇平方キロメートル、直近一〇年の人口は三六六人（平成二二年）から

渚の交番「ひなせうみラボ」。

三一九人（同二七年）、三六二人（令和二年）と一時的に減少したものの、回復を見せた。おもな産業は、水産資源を活用した漁業や食品加工業、宿泊業などである。

このほか島内にある「頭島グラウンドゴルフ場」は、天然芝コース二面からなる備前市直営の施設であり、訪問時には地元と思しき方々がプレーしていた。馬場課長によると、夏季は涼しい早朝のうちに楽しまれているそうだ。

頭島より牡蠣養殖いかだと頭島大橋を望む。

備前観光協会と市を中心とした「里海・里山ブランド推進協議会」の中で、日生諸島を中心に観光全般にわたる大きな取り組みとして進められてきたのが「渚の交番」事業である。この事業は「海辺の様々な活動、活動に係る人そして情報を横断するような拠点を整備するプロジェクト」で、日本財団が主導している。令和五年八月現在、全国一四カ所に拠点が設置されており、備前市では頭島のゴルフ場に隣接する「ひなせうみラボ」が該当する。同三年に開設されたこの施設は、地元の漁師と子どもたちによる漁場再生活動の拠点、「海との共生」をテーマとした海洋教育を目指しており、多目的室、物販スペース、海洋環境研究室、レストラン、牡蠣むき施設、マリンアクティビティ拠点などを備える。日生町漁業協同組合の漁師による牡蠣むき体験や牡蠣養殖体験、アマモの種取りや種まきなどのアマモ場再生活動、シュノーケリング、カヤック体験などが行なわれている。なお、日生町漁協が養殖出荷している「日生かき」は「備前市里海里山ブランド」に認証されている。三〇年以上、アマモ場の再生や海ごみの持ち帰り活動を継続し、あらゆ

る世代や立場の方々と連携して里海のすばらしさを発信していることが認証につながったという。日生かきは沖だし（ある程度生育した稚貝の育てる海域を移動させる作業）から一年で出荷され、新鮮で濃厚な味わいが特徴である。

架橋前後の変化

架橋により二つの島にどのような変化が起きたのか、指定解除を議論した平成二八年五月二五日の「国土審議会第一四回離島振興対策分科会」資料などから見ていくこととしよう。

①観光

鹿久居島にある「古代体験の里 まほろば」の利用者（日帰りを含む）は、架橋前（平成二六年四月～一一月が五七四人）と架橋後（平成二七年同期間が一三四〇人）で約二・三倍に増加。また鹿久居島の観光農園の利用者も増加している。

②産業

頭島の主要産業である養殖カキの本土への出荷が海上輸送から陸送に変わり、輸送コストが約三分の一に低下している。

③医療

二次救急指定病院の備前市国民健康保険市立日生病院（診療科計一一科）が、備前♡日生大橋のたもとにある。定期船から車での通院に変わったことで、救急搬送の所要時間も大幅に削減された。架橋後に、頭島で夜間に急病人が発生した事例では、迅速に救急搬送が行なわれ、重篤にならずに済んだ。

④通学・通勤

頭島の小学校は平成二八年四月に本土の小学校との統合により閉校。児童はスクールバスで通学している。中学・高校の生徒および社会人も時間的な制約がなくなり、定期船の欠航による欠席・欠勤も減少した。

⑤買い物

時間を気にせずに本土へ車で買い物に行くことが可能となり、買い物に行く頻度も上がった。食品の移動販売車が来るようになるとともに、食料品などの宅配サービスも受けられるようになった。

⑥交通

本土と鹿久居島、頭島、大多府島および鴻島を結ぶ定期航路は、九便／日（うち鹿久居島は二便、頭島は八便寄港）で、便数は架橋前後で変更なかったが、現在は七便／日（鹿久居島は寄港なし、頭島は五便寄港）となっている。定期船の利用者数は、架橋後は架橋前の約四割（平成二六年の九万九五〇八人に対し、同二七年には四万一七一四人）に減少。架橋当初は両島ともに路線バスが運行されておらず、車を所有しない住民や観光客は定期船を利用していたが、現在は日生駅から市営バスが運行している。

⑦情報通信

架橋にともない両島に光ファイバが敷かれ、情報通信環境が整った。

●

以上、簡単に架橋島の現況を見てきたが、最も重要な点は、架橋効果を継続させる方策の実施である。つまり効果を一時的なもので終わらせないためには、漁業、みかん園、「古代体験の里まほろば」や鳥獣保護区など各島の特徴的な地域資源をつなぐ観光プログラムづくり、光ファイバなどの通信技術を活かしたUIターンなどの促進による島内産業の後継者の育成や起業家の誘致などの取り組みが求められる。例えば、定期航路を担う大生汽船は、観光船「NORINAHALLE（のりなはーれ）」を平成二九年四月に就航させた。赤と白のツートンカラーの外観が特徴的な愛らしいこの船はウッディ感あふれる内装で、九州新幹線「つばめ」や豪華寝台列車「ななつ星in九州」なども手がけた岡山県出身の水戸岡鋭治（えいじ）氏のデザインである。夏には、日生諸島の一三の島々すべてを見渡せるルートを通るショートクルーズも行なわれており、デザイナーの知名度もプラスして人気を博しているようである。これに日生諸島の島々の多様な体験プログラムを組み合わせることができないだろうか。

本土部の港近傍では、ご当地グルメの「カキオコ（牡蠣のお好み焼き）」を提供する飲食店が集積している。日生は岡山県内屈指の牡蠣の水揚げで知られる漁師町。「渚の交番」事業のように、漁業関係者が広域的につながり観光の活性化に取り組むことも重要だろう。また、観光の柱の一つである柑橘農園と漁業の連携なども可能性が大きい。日生諸島には、一次産業の頑張りを観光業が受け止め、誘客につなげるという好循環があるように感じられる。

（水）

大多府港に着岸するNORINAHALLE。